

令和元（2019）年 6月 28日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 洪 忠婷（コウ チュウテイ）

〈学生番号〉 G5D5022015

〈論文題名〉 副詞に関する研究

－「なかなか」の意味・用法を中心に－

審査委員

主査 外国語学部教授 遠藤 裕子

副査 外国語学部教授 木村 政康

副査 外国語学部教授 阿久津 智

I. 論文の主旨

本論文は、肯定・否定の両構文で使用される副詞「なかなか」について、コーパスによる用例の調査・分析と先行研究の調査・分析に基づき、その意味・用法を明らかにすることを主目的とした研究である。さらに、「なかなか」と関連する副詞との使い分け、及び、日中の日本語教科書における「なかなか」の扱いについても分析を行い、日本語教育の立場から「なかなか」を中心とする副詞の様相を明らかにしようとしている。

意味・用法については、概略、「期待される事象の実現を容易に見ることができないと捉える」、「物事の程度が高いと捉える」、そして中間領域の「事象実現の困難度が高いと捉える」の3種としている。「なかなか」の修飾する事象と話し手との関わり、事象への期待の仕手などによって、中核的な文法的意味が連続的に広がることを用例とともに明らかにした。また、文法的否定・語彙的否定・文法的肯定の用法の間に連続性があることも具体例とともに示している。

関連語と対照した意味・用法の分析も行い、「なかなか～ない」と「あまり～ない」がどのような条件下で意味的に接近するか、また、「なかなか」の肯定用法が人に勧める文で好まれる理由など、新たな角度から解明している。

また、日本語教科書の調査・分析では、日中で「なかなか」の扱いが異なることを明らかにした。中国の教科書では、程度副詞としての用法を初級から提示しており、予想・期待があまり感じられない用例も少なくないこと、陳述副詞としての導入においては有対自動詞が使用されていないことなどを、分析の結果示している。

文法研究に日本語教育の観点からの分析を加え、「なかなか」を中心とする副詞を多面的に捉えた論文である。

II. 論文の構成

本論文の構成は、以下次の通りである。

第1章 序論

- 1.1 研究背景と目的
- 1.2 研究方法
- 1.3 論文の構成

第2章 副詞に関する先行研究

- 2.1 副詞に関する先行研究
 - 2.1.1 山田（1936）による研究
 - 2.1.2 橋本（1959）による研究
- 2.2 陳述副詞と程度副詞に関する先行研究

- 2.2.1 工藤（1982）による研究
- 2.2.2 工藤（1983）による研究
- 2.2.3 渡辺（1990）による研究
- 2.2.4 仁田（2002）による研究
- 2.3 否定と呼応する副詞に関する研究
- 2.4 まとめ

第3章 「なかなか」に関する先行研究

- 3.1 辞書・辞典・参考書による「なかなか」の記述
 - 3.1.1 辞書による「なかなか」の記述
 - 3.1.1.1 『新明解国語辞典 第七版』
 - 3.1.1.2 『岩波国語辞典 第七版 新版』
 - 3.1.1.3 『明鏡国語辞典 第二版』
 - 3.1.1.4 『大辞林 第三版』
 - 3.1.2 用法辞典などによる「なかなか」の記述
 - 3.1.2.1 『基礎日本語辞典』
 - 3.1.2.2 『現代副詞用法辞典』
 - 3.1.2.3 『ちがいがわかる 類語使い分け辞典』
 - 3.1.2.4 『日本語誤用辞典』
 - 3.1.3 参考書による「なかなか」の記述
 - 3.1.3.1 『副詞（外国人のための日本語例文・問題シリーズ1）』
 - 3.1.3.2 『日本語、こんなときどうする？副詞篇』
 - 3.1.3.3 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』
 - 3.1.4 辞書・辞典・参考書における「なかなか」のまとめ
- 3.2 「なかなか」の意味用法の史的変遷
 - 3.2.1 国語辞典の記述
 - 3.2.2 塚原（1991）による研究
 - 3.2.3 田和（2017）による研究
 - 3.2.4 まとめ
- 3.3 現代語の「なかなか」に関する研究
 - 3.3.1 服部（1994）による研究
 - 3.3.2 工藤（1999）による研究
 - 3.3.3 丁（2009）による研究
 - 3.3.4 趙（2015）による研究
 - 3.3.5 まとめと問題点

第4章 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」における「なかなか」の調査

4.1 調査の方法

4.2 調査の結果

4.2.1 BCCWJにおける「なかなか」の出現状況

4.2.2 BCCWJにおける「なかなか」と述語の共起状況

4.2.2.1 文法的否定形式を伴う場合

4.2.2.2 文法的否定形式を伴わない場合

4.3 まとめ

第5章 「なかなか」の意味・用法についての考察

5.1 本研究における「なかなか」の分類

5.2 否定表現における「なかなか」

5.2.1 本研究の分析の観点

5.2.2 「話し手、聞き手、などと関係がある事象」場合

5.2.3 「話し手と直接的関係のない事象」の場合

5.2.4 可能を表す表現との関係

5.2.4.1 可能を表す表現の場合

5.2.4.2 可能を表す表現ではない場合

5.2.5 否定表現における「なかなか」のまとめ

5.3 肯定表現における「なかなか」

5.3.1 本研究の分析の観点

5.3.2 「話し手が何らかの予想や期待を持つ」場合

5.3.3 「話し手が単に自分の経験による基準に照らす」場合

5.3.4 述語との共起関係

5.3.4.1 先行研究と問題提起

5.3.4.2 「有標・無標」の検討

5.3.4.3 共起する述語について

5.3.4.4 「の」を介する連体修飾と「の」を介しない連用修飾の区別

5.3.4.5 状態性・程度性を有する動詞の特徴

5.3.5 肯定表現における「なかなか」のまとめ

5.4 中間領域における「なかなか」

5.4.1 本研究の分析の観点

5.4.2 「文法的肯定・意味的否定」

5.4.2.1 語彙的否定形式の場合

5.4.2.2 語彙的否定形式ではない場合

5.4.3 「文法的否定・意味的肯定」

5.5 肯定表現、中間領域、否定表現の連続性

5.6 「なかなか」の意味・用法のまとめ

5.6.1 「なかなか」の各意味・用法

5.6.2 「なかなか」と共起する述語

第6章 日本語教科書における「なかなか」の扱いに関する考察

6.1 調査の概要

6.1.1 調査の目的

6.1.2 調査対象の教科書の選定

6.1.3 調査の内容と方法

6.2 日本で作成された日本語教科書における「なかなか」

6.2.1 調査対象

6.2.2 教科書の分析

6.2.2.1 初級教科書に現れた「なかなか」の用例数

6.2.2.2 中上級教科書に現れた「なかなか」の用例数

6.2.2.3 教科書における「なかなか」の出現状況のまとめ

6.2.2.4 初級教科書における「なかなか」と共起する述語の状況

6.2.2.5 中上級教科書における「なかなか」と共起する述語の状況

6.2.2.6 初級教科書における「なかなか」の初出の使用法

6.2.2.7 初級教科書における「なかなか」の3つの用法の出現順

6.3 中国で作成された日本語教科書における「なかなか」

6.3.1 調査対象

6.3.2 教科書の分析

6.3.2.1 初級教科書に現れた「なかなか」の用例数

6.3.2.2 中上級教科書に現れた「なかなか」の用例数

6.3.2.3 教科書における「なかなか」の出現状況のまとめ

6.3.2.4 初級教科書における「なかなか」と共起する述語の状況

6.3.2.5 中上級教科書における「なかなか」と共起する述語の状況

6.3.2.6 各教科書における「なかなか」の初出の使用法

6.3.2.7 各教科書における「なかなか」の3つの用法の出現順

6.4 まとめ

6.4.1 日中の日本語教科書における「なかなか」の出現状況

6.4.2 日中の初級教科書における「なかなか」の意味用法の扱い

第7章 「なかなか」の関連語に関する考察

7.1 「なかなか～ない」と「あまり～ない」

7.1.1 先行研究および本研究の分析の観点

7.1.2 初級日本語教科書に見られる「なかなか」と「あまり」

7.1.3 「なかなか」と「あまり」の分析

7.1.3.1 「食べられない」

7.1.3.2 「できない」、「～ことができない」

7.1.3.3 「ない」

7.1.4 「なかなか」と「あまり」のまとめ

7.2 「なかなか」と「とても」、「かなり」

7.2.1 先行研究および本研究の分析の観点

7.2.1.1 辞典・辞書による「なかなか」、「とても」、「かなり」の記述

7.2.1.2 渡辺（1990）による「なかなか」、「とても」、「かなり」の分析

7.2.1.3 疏（2018）による「なかなか」、「とても」、「かなり」の分析

7.2.1.4 その他の研究の分析

7.2.2 「なかなか」と「とても」の分析

7.2.3 「なかなか」と「かなり」の分析

7.2.4 「なかなか」と「とても」「かなり」のまとめ

第8章 結論と今後の課題

8.1 結論

8.2 今後の課題

参考文献

謝辞

付録1 BCCWJにおける、文法的否定形式を伴わない場合の共起動詞用例

付録2 日中の日本語教科書における「なかなか」の使用例

Ⅲ. 本論文の概要

第1章 序論

本章では、研究背景と目的、研究方法、論文の構成について述べている。

まず、副詞「なかなか」が肯定・否定の両構文で使用されることと、類似表現との差が日本語学習者には習得困難であることを述べ、コーパスによる具体例の調査、日中の教科書による扱いの調査、そして文献調査による理論的分析によって、「なかなか」を中心とする副詞について、日本語教育の観点から意味・用法を明らかにすると述べている。

第2章 副詞に関する先行研究

本章では、副詞の位置づけ、「なかなか」が属するとされる陳述副詞と程度副詞、そして、否定と呼応する副詞について先行研究を検討しまとめている。

陳述副詞に関しては、まず「陳述」について述べたうえで、工藤(1982)による陳述副詞

の3分類では、叙法副詞の現実認識的な叙法に「なかなか」が含まれると述べている。

また、程度副詞の体系と諸特徴について複数の先行研究を取り上げ、評価性と程度性、静的な状態、比較と計量などの概念を紹介している。渡辺(1990)では、「なかなか」が、発見系・評価系の類に属すること、仁田(2002)では、純粹程度の副詞に属することや形容詞以外にもある種の動詞と共起することなどを述べている。

第3章 「なかなか」に関する先行研究

本章では、まず、国語辞典により、その品詞性等について確認している。そして、感動詞の用法が、やや古く位相的にも限られているとしている。

次に、用法辞典や指導参考書等を幅広く収集し、現代語としての「なかなか」の意味、類義語、使用上の注意点等についてまとめている。そして、用法的には、大きく否定構文と肯定構文に分けるものが多いが、それぞれの意味記述については注目点が異なり、一致しない様子を示している。

3.3 では、「なかなか」に関する最近の文法研究や量的調査を検討している。否定構文の用法では「期待される事象の成立を容易に見ることができない」「アクチュアルな状況における実現の困難さ」、肯定構文の用法では「見くびれない(軽く評価して済ませられない)程度に(述語P)である」「状態の程度が予想あるいは期待に到達している」などの意味が主張されていることを整理して示し、問題点を指摘している。「予想・期待」は常にあるのか、また誰による「予想・期待」かなどについて、さらなる考察の必要性を指摘すると同時に、日本語教育の観点から、抽象的記述と具体的形式や共起述語を関連づけて分析すると述べている。

また、国語辞典の中でも『大辞林』以上の語数のものには、古典的用法が現代語と区別されずに記載されていることが多い。そこで、「なかなか」の語源や意味の変化などについても先行研究を調査してまとめ、本研究の分析対象を明確にしている。

第4章 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」における「なかなか」の調査

本章では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を利用し、共起語に焦点を当てて、その使用状況を調査し、結果をまとめている。

まず、全体的な使用傾向であるが、「メディア／ジャンル」別で、出現率の高い順から「国会会議録」「ブログ」「知恵袋」となっており、「法律」では0件であることを示している。

共起語の調査は、文法的否定形式を伴う場合と伴わない場合に分けて行っている。その結果、文法的否定形式を伴う場合の共起述語はほとんどが動詞であり、「可能形」「有対自動詞」が多く、「受身形」「授受を表す補助動詞(の可能形)」「意向形+する」などもあることが明らかになったとしている。また、数は少ないが、「悪くない」「楽じゃない」といった形容詞の否定形も見られたとしている。

文法的否定形式を伴わない場合は、形容詞述語が最も多く、動詞述語と共起する例は1割未満である。この動詞の具体的な種類や形式に関して、従来の研究ではほとんど論及されていない。本研究では、状態性・程度性を有する動詞述語として、可能形、連体修飾用法、テイル形、そして、終止形で使用される例が多くあることを具体的に示している。

第5章 「なかなか」の意味・用法についての考察

本章では、「なかなか」の意味用法の分析結果を述べている。

「なかなか」の用法は、文法的形式と性質によって大きく否定表現、肯定表現、及び中間領域の3種に分類され、意味的には、肯定・否定の2つに分類されるとしている。そして、それぞれが中核的な意味から広がりを持つことを主張し、肯・否の連続性についても説明している。

まず、否定表現における「なかなか」は、「期待される事象の実現を容易に見ることができないと捉える気持ちを表す」という意味が中核にあり、「期待」の度合いに関しては、話し手が事象との関係をどう捉えるかによって変わるとしている。そして、事象が「話し手、聞き手などと関係がある」か「話し手と直接的関係がない」かを用例の文脈から検討し考察を行っている。事象との関係の捉え方と誰による「期待」かによって「なかなか」の意味が異なって感じられることを具体的に示している。

次に、肯定表現における「なかなか」は、話し手による何らかの基準で程度を判断する表現であり、「物事の程度が高いと捉える気持ちを表す」という意味が中心にあるとしている。そして、「何らかの予想や期待を持つ」場合と「単に自分の経験による基準に照らす」場合があり、前者では、誰による予想・期待かは文脈によって異なることを用例によって明らかにしている。

肯定表現における「なかなか」については、さらに2点指摘している。従来、肯定表現の場合は、話し手が歓迎する状態を表す述語と共起しやすいとされている。ただし、「なかなか」が名詞と共起する場合、「の」を介す連体修飾の用法もあり、この場合はかなり広い範囲の名詞に使用可能である。第4章での調査の結果、「なかなかの名詞」の形では、中立的・形式的な語の一つである「もの」が多用されていることが明らかになった。この慣用化表現はある物事に対する話し手の高い評価を表すものであり、「なかなか名詞だ」とは異なる「なかなかの名詞」の端的な例と言えるとしている。また、動詞述語と共起する場合の動詞の特徴は、その動詞の動作性（動き）が見えにくく、物事の様子、性質などを表し、「状態性」が現れてくるものであると述べている。

3つ目の中間領域は2つに分類されており、「文法的肯定、意味的否定」の用法は、意味的には、否定表現における「なかなか」の用法と共通した部分があり、事象実現の困難度が高いと捉える気持ちを表すと述べている。2つめの「文法的否定、意味的肯定」の用法は、「悪くない」など否定形で慣用化した表現の類で、具体的な例は少ない。否定形全体で

肯定表現における「なかなか」と意味的に知覚なると述べている。

最後に、3種の連続性について論じている。「期待される事象の実現を容易に見ることができないと捉える」は、中間領域の「事象実現の困難度が高い」と部分的に重なり、これはさらに「物事の程度が高いと捉える気持ちを表す」と部分的に重なる。また、否定の「なかなか」は、話し手が期待を持っているが実現しないことを評価するものであり、肯定の「なかなか」は、話し手が期待を持っていて実現したことを評価するものであると考えられるとしている。

第6章 日本語教科書における「なかなか」の扱いに関する考察

本章では、日本と中国で作成された日本語教科書 35 種 73 冊を対象に、「なかなか」の扱いを調査して実態を示し、日中の教科書に相違が見られることなどを明らかにしている。

1 点目は、「なかなか」の出現順の違いである。日本の初級教科書ではほとんどが否定用法を提示しているのに対し、中国の初級教科書では肯定用法や中間領域の用法も見られ、複数提示の場合の順番もまちまちである。2 点目は、中国の教科書では肯定用法の場合の初出の例文に「予想・期待以上に高い程度」と考えられるものより「話し手の基準に照らして高い程度」と考えられるものが多いことを挙げている。3 点目は、否定用法で共起する動詞のタイプに関して、日本の初級教科書では、有対自動詞が多く、可能動詞と「ことができない」が各 2 種で使用されているのに対し、中国の教科書では、可能動詞が多く、無対自動詞と「ない(形容詞)」が各 1 種で使用されていることである。

教科書作成の経緯等については不明な点も多いが、作成者の「なかなか」の理解や「可能」の理解が教科書に反映されていることが示唆されるとしている。

第7章 「なかなか」の関連語に関する考察

本章では、文法及び日本語教育の立場から、「なかなか」と、類義的な他の副詞との対照を行い分析している。

否定構文における「なかなか」と「あまり」は、動詞述語と共起する場合に置換え可能になることがある。「事象の実現を容易に見ることができない」ことを一般論として述べると、結果的に頻度が少ないことが推論されるため、「あまり～ない」の意味に近くなる。また、事象が話し手と関係の薄い事からの場合は「期待」の度合いも相対的に低いため、動詞の意味や文脈によっては「あまり～ない」との差が小さくなると述べている。

肯定構文における「なかなか」と「とても」は、「物事の程度が高いと捉える気持ちを表す」ことを一般論として述べると、話し手の予想や期待の度合いも相対的に低いため、「とても」の意味との差が小さくなるとしている。また、「なかなか」には、話し手が聞き手の期待度を推測して言う用法が可能であり、人に勧める文脈で効果的であることを指摘している。「なかなか」と「かなり」は、「話し手による何らかの基準で程度を判断したこと」

を一般論として述べるとき、意味の差が小さくなるとしている。また、「なかなか」は、物事の様子、性質などを評価し、「かなり」は、物事の数量に近い性質を評価することができる点も異なると述べている。

第8章 結論と今後の課題

本章では、本研究の結論を述べ、さらに今後の課題について述べている。

IV. 論文の総合評価

1. 論文提出までの経緯および審査結果

学位申請者は、2015年4月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学した。外国語（日本語）検定試験に合格し、修了に必要な10単位以上を取得している。

博士論文完成発表会は、2018年12月22日に実施され、学位論文は2019年4月3日に受理された。論文提出時の業績は、言語教育研究科博士論文中間発表会、及び、学内外における論文と口頭発表（すべて単著）を合わせて9本である。

第1回審査委員会を2019年5月24日に開催した。審査の結果は全員一致で合格であったが、若干の不十分な表現や誤記等があったため、これらの修正を行ったうえで博士論文として認めると判定した。2019年6月8日、最終口述試験を行い、引き続き第2回審査委員会を開催して審議した結果、全員一致で「合格」と判定した。

2. 審査所見

本論文は、副詞「なかなか」を対象に、コーパス（BCCWJ）における用例の調査・分析と先行研究の調査・分析に基づいてその意味・用法を明らかにし、さらに、「なかなか」と関連する副詞との使い分けや、日中の日本語教科書における「なかなか」の扱いについても分析を行って、「なかなか」を中心とする副詞を多面的に捉え論述したものである。

「なかなか」の意味・用法に関しては、中心的意味を設定し、そこに話し手と事象との関わりという要素を取り入れて、先行研究における「期待・予期」の曖昧さという問題点を解消した点は新しい提案であると認められる。話し手が自身に関わる事象の実現を期待する場合が一つの極にあり、関わりのない事象ではあるが期待する人もいるだろうと捉える場合がもう一つの極にある。そして、聞き手や、話し手と関係の深い人物の期待に話し手が共感する場合が中間にあって連続しているとする主張は、これまでに見られなかったものである。分析に際しては、コーパスの用例を文脈から丹念に分析して結論を導き出していると認められる。また、「なかなか」は書かれた文章よりも口頭表現で多く見られる副詞であるが、これは、単に主観性が強いというだけでなく、聞き手の期待を推測し共感する用法と関係がある可能性もあり、その点でも有益な捉え方であろう。

意味・用法分析の資料となるコーパスの調査・分析については、文法的否定形式を伴うか否かという明示的な基準を上位に据えて分類し、語彙的否定形式を中間領域として、具体的な共起語を多く挙げた点も、日本語教育の観点から評価できる。「付録1」も、一定の資料価値が認められる。

日本語教科書における「なかなか」の調査は、用例の前後や解説まで丁寧に調査しており、質・量ともに信頼に足ると考えられる。中国の教科書では、肯定用法を初級から提示しており、予想・期待があまり感じられない用例も少なくないことなどは、新しい知見であり評価できる。中国と日本の教科書作成者の「なかなか」に対する意識の差が示唆される興味深い分析結果と言えよう。

また、関連語との対照において、「なかなか～ない」と「あまり～ない」がどのような条件下で意味的に接近するか、また、「なかなか」の肯定用法が人に勧める文で好まれる理由などについて論述している点も、従来見過ごされてきた内容であり評価できる。

「なかなか」に関するこれまでの研究は、文法研究か実用的参考書かのどちらかに片寄りがちで、非母語話者である日本語教師に役立つような理論的かつ具体性のあるまとまった研究は見られなかったと思われる。その点で、中国語を母語とする筆者の視点が研究方法や分析に活かされており、意義のある研究と言えよう。

一方で、問題点もいくつか挙げられる。

まず、「副詞に関する研究」という論題でありながら「なかなか」以外の副詞の分析が少なく、体系的な考察が見られない点は物足りなさを感じる。先行研究が十分に活かされておらず、第7章の結論はやや散漫である。

コーパスの用例分析は、「なかなか」という語の性質上、その前後をかなり長く読む必要が出てくる。事例のため、やや分かりにくい例が存在することは否めないが、用例によっては文の読み込みに若干不十分な点も見られた。

また、全体的に、簡潔で正確な表現、明快な論理展開という点で向上の余地があると思われる。特に、結論部分は、深い分析と精緻な表現は不可分なものである。引き続き、言語表現技術を磨くよう努めてもらいたい。

なお、第1回審査委員会で指摘された問題点に関しては、内容、日本語表現、図・表などについて、すでに加筆・修正を行っている。

以上に示されるように、本論文は、審査基準である研究テーマ、先行研究・文献資料・調査などの情報収集、研究方法のいずれにおいてもおおむね適切・妥当なものであり、論旨も妥当なものである。論文の構成、言語表現、体裁などについても、問題はない。本論文は研究内容に独創性を有するものであり、当該分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであると認められる。

学位申請者は、2016年から2年半にわたり日本の日本語学校で日本語講師を務めており、研究のみならず教育においても研鑽・経験を積んできた。将来、言語教育の専門家として

高等教育機関で活躍していく能力と学識を十分持つものと認められる。

3. 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、3委員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。